ONE PIECE　～世界を照らす太陽譚～

麻美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＯＮＥ　ＰＩＥＣＥ　～世界を照らす太陽譚～

【Ｎコード】
Ｎ３０７２Ｖ

【作者名】
麻美

【あらすじ】
青年はある日突然森の中で目覚めた。
体が縮んでる！？顔が違う！？悪魔の実！？ワンピース！？
そんな理不尽な仕打ちを恨みながらも快活に生きていく物語。

※同サイトで同タイトルのものが投稿されていますがその投稿主も私です。
この小説はそのリメイク作品ということになります。

第零話　プロローグ（前書き）

長らくお待たせして申し訳ないです
不定期になるとは思いますがこれからもよろしくお願いします

第零話　プロローグ

「……参ったな。これは一体どういうことだ？」

朝目が覚めたら森の中にいた、なんてことが現実で起こるとは思わなかった。
ほっぺをつねってみても痛かったからまず夢ではないだろう。
それにしてもどういう原理だ？
まさか拉致ったけど面倒になったから森に捨てられたなんて有り得ないし。
あぁ、俺の頭がおかしいわけではないぞ？
実際気がついたら森の中にいたんだから仕方ないんだ。

「取り敢えずここにいたって仕方ないし、適当に歩いてみるか」

そう思い立って歩き始めてはみるものの、なんか歩みのペースが遅い。
というより歩幅が小さい気がする。
まぁ割りとどうでもいいから気にしなくても良いか。
視点も低い様な気がする――

「って縮んでる！？」

鏡がないから全体を見ることは出来ないが、明らかに縮んでいる。
がっしりとして１８０、とまではいかないもののすらっとして１７０後半はあった筈なんだがなぁ。
体が縮むなんて聞いたことねェぞ。
もしかして俺一気に歳とった？

それとも若くなった？
いや、どっちにしてもファンタジーの世界じゃあるまいし、そんなこと有り得ないだろ。

そんなこんなをしている内に砂浜に着いた。
そこからは辺り一面ブルーな海。
俺の気分の方がよっぽどブルーだが。
まぁそれは良いんだ。
しかしなんだ、あれは。
海から何か大きな黒い影がどんどんこっちに近付いて来るんだが。

バシャァァァンッ！

「ほたて！？」

なにか思ったらほたてみたいな二枚貝がいきなり俺の方目掛けて勢いよく飛んできた。
これは不味いぞ。
流石に避けられるほど体力はないぞ。

『ウホッ！』

「……」

これは不味いと思って絶句した。
前方からは巨大二枚貝、後方からは巨大なゴリラ。
人生積んだだろ、これ。
もういいや。
こんなわけのわからない森で暮らすなんて俺には無理そうだし、諦めよう。

そう思って俺は体の力を抜いてその場に座り込んだ。
が、これが正解だったらしい。
ガキンッ、と金属がぶつかる様な音がした後、両者はそれぞれ出て来た方向へと吹っ飛んでいった。
互いにぶつかって互いに吹っ飛ぶってどんな破壊力やねん。
なにはともあれ命拾いはしたんだ。
しかしあんな巨大生物がいるとわかったらおちおち休めやしないどころか少しでも気を抜くことも出来なさそうだ。

「取り敢えずここから離れよう」

あんなことがあった現場にこれ以上いたところで何のメリットもないので海岸線上に歩き始めた。
もしかしたら島じゃなくて半島って可能性もあるし、無人島じゃない可能性もあるしな。
まぁもしもいたらの話だが、こんなふざけた島に住んでるんだから相当ふざけた住民なんだろう。

そしてまた暫く歩き、今度は砂浜に民家がたっているのを見つけた。
いや、民家というより倉庫に近い様な……。
いやいや、いかんいかん！
人の住居を馬鹿にするほど俺も落ちぶれちゃいないよ！
それにしてもあんな貝が海から突撃してくるのによくこんなところに家を建てたな。
まぁそれは森の中でも同じなんだろうが、不意打ち的に海から来る方が恐いと思うわ。

コンコンッ……

ノックをしてみるが、数秒経っても返事がない。

「あの～！」

声を掛けてみるもやっぱり返事がない。
どこかに出かけているんだろうか。

「失礼しま～す」

ホントに失礼だとは思うが、無断で侵入させてもらった。
中にはやっぱり誰も居らず、何年も使われていないかのように部屋中埃を被っていた。
取り敢えず換気だな。
こんな埃まみれの家の中を探索すると肺炎とかなりそうだし。
一先ず換気を済ませ、粗方箒を払った部屋をもう一度ゆっくり見直してみる。

「ん？なんだこれ？」

本棚に色々な本があったが、俺には机の上に置いてあった日記の様なモノの方が気になった。
人の日記を見るなんて悪趣味だとは思うが、手掛かりになりそうなものがこれくらいしかないから仕方ないか。
この日記の持ち主、無礼な好意を許したまえ。

「まぁ1番新しいページから読むのがセオリーですよね」

古い方から読んでいっても長くなるだけだし。

「なになに？」

『恐らく誰かがこれを見ている時には既に私はこの世にはいないだろう』

ちょっと待て。
これ日記だよな？
なんで日記にこんな恐い事書いてるんだよ。

『私はもう疲れた。ここに家を建て住み始め、長い時が経つ。しかし何年経っても誰も訪れることはなかった』

寂しかったのか。
こんなところで1人で住むのは相当気が滅入りそうだし、当然かもな。

『人は1人では生きられない。ここに来て、ようやくその意味がわかった。なので私は死ぬことにした』

理由になってないと思うんだが……。

『最後に、この日記を開き、私のみっともない愚痴を聞いてくれたことを感謝する。そしてその礼としてこの家のタンスの中にあるものを差し上げよう。さようなら』

日記はこれで終わり。
さて、タンスの中だっけ？
なにか巧妙な罠かもしれないし、もう既に何もないのかもしれない。
けどなにかここで生きて行くために必要なモノがあるのなら、と思い俺は腐りかけのタンスをこじ開けた。

「……なんだこれ」

腐りかけのタンスの中に入っていたのにも拘らず、全く腐蝕していない妙な柄の果物が入っていた。
これはあれか？
某海賊漫画に出てくる悪魔の実みたいなヤツか？
いやいや、現実にそんなものあるわけないでしょうが。

「その下になにかあるな……」

悪魔の実（仮）の下に紙の様なモノが。
そこには
『サンサンの実。太陽人間。高熱。自然系（ロギア）。放熱』
掠れ掠れで読みとれるのはその程度だが、ますますこれが悪魔の実ということが現実味を帯びて来た。
誰かの悪戯かもしれないし、でもそれにしては手が込んでるし、ワンピースの世界だとああいう貝とかゴリラとかいても不思議ではない。

「わっかんねぇなぁ！もう！」

こうなったら自棄だ！
悪魔の実だろうが何だろうが食ってやるよ！

ムシャムシャムシャムシャ……

「おえ……」

やっぱり不味かった。
まぁこれで俺も悪魔の実の能力者ってわけなのか？
太陽人間だっけか。

自然系なんだから何かできないものか。

「ぬんっ！」

取り敢えず力を入れてみた。思いっきり。
そして腕に念も送った。

「え？ちょっ！俺の腕燃えてる！」

ボウッ、っと黒い炎が俺の腕を包んだ。
なんだこれ。
かっこよすぎるだろ。
しかもまったく熱くない。
体が太陽になれば熱いとかそういうのはなくなるのか？
わけわかめだな。
でもちょっと楽しいから外に出て遊ぶか。

「うー……どん！」

右手に黒い炎を宿したまま海に向かって正拳突きをしてみた。
そしたら緑の宇宙人の魔貫光殺砲的なモノが出た。
あれ？めっちゃ楽しいぞ？

「地球を……舐めるなよ……！なんつって！」

いやぁ、楽しいな。ピッコロさんごっこ。
少し疲れたから家の裏に流れてた川で水浴びでもするか。
そう思って川に軽く足をつける。
やっぱり水に浸かると力が抜けるって言うのは本当らしいな。
それにしても誰だよ、俺。

水面に移る顔が俺じゃないんだけど。

「もう日本人でも普通の人間でも無い……。本当の名も忘れてしまった能力者だ……。なんつって！」

１人でピッコロさんごっこするくらいしか気を紛らわす方法がないって言うのも結構辛いな。

それは置いておいて、本当に知らない顔だ。

黒い長髪に端正な顔立ち。

う～ん、顔つきはどうだろう。Ｆａｔｅのランサーみたい、と言えば分り易いか。

どうせならピッコロさんになってたらよかったのに。ランサーもきらいじゃないけどね。

「さぁて、今日はもう疲れたし、曰くつきだけどあそこくらいしか寝床がないからあそこで寝るか！」

第零話　プロローグ（後書き）

閲覧ありがとうございます
感想を頂けると作者の励みになり、指摘もしてくだされば更なる向上にもなりますので是非ともよろしくお願いします

第壱話　出会い

「宇宙のかなたへ、さぁ行くぞ！ＨＡ☆ＨＡ☆ＨＡ！」

朝からハイテンション。
食糧を探しに叫びながら森の中へ突撃して行く。
なんで叫ぶか？
そんな野暮なことは聞かないでくれたまえ。
寂しいからと恐いから、それとクマ避けのために決まってるじゃないか。
昨日寝ている間は何も起こらなかったが、いつ何が起こるかわからない。
その為にあの家を強化する木材も拾わないとな。
そしてなによりこの島から脱出するための筏も作らないといけないし、やらなきゃいけないことは多いぞ！

「……死にたい」

声を出しているのにも拘らず猛獣共は俺に向かって突っ込んでくるし、避ける必要もなく勝手にすりぬけて行くヤツらはアホな顔をするし、木の実取ろうとしたら木を倒すし、それを木材にしようとしたらなんか睨んで来て出来ないし、どんだけ俺の事嫌ってるの。
ここまで動物に嫌われる方じゃなかったんだけどなぁ。
※彼らは俺を餌にしようとしているだけです。
そんな猛獣共を無視して――死なないとわかっていても恐いから意識しない様にしてるだけ――食糧を確保し、何度も往復して木材を運んだ。
そうやっているうちにね、俺はあることを発見した。

体から出る能力による黒炎、あれは温度も自由自在らしい。
だから人肌にして炎としての役割を停止させ、木材を燃やさずに運ぶことに成功した。
他にも木を切ったりも出来て、かなり便利だ。

「それにしても、これはメラメラと何が違うんだ？」

色か？
ただそれだけしか違わない能力が存在するのか。
やはり『太陽』というだけあってそれなりの事が出来るのか。
わからねぇなぁ。
少なくとも現時点でわかってるのは色、それに恐らく温度の操作ってことくらい。
まぁ無理に差別点を探す必要はないんだけど。

「あー！考えても限がねェなぁ！これぱっかりは実を食った本人と比べてみねェと！しっかし、もう家の補強は済んだし、筏を作ろうにも蔓みたいなのがないし、することがねぇ」

体を鍛えておいて損はないのだろうけど、ノリ気にはならない。
現状維持程度はするが、この能力があれば身体能力なんて必要ないんじゃないのかと思う。
だってそうだろ？
能力を封じる能力なんてないだろうし、能力を封じる海楼石に触れれば力が抜けて機能停止、自然系（ロギア）でしかダメージを与えられない体。
これだけ揃えばそう思うのが当然だろう。
覇気を使えるヤツなんてほとんどいないだろうし、逆に使われてもこっちも使えばいいというだけの話。
論理的に説明しているが、実際はそうやって辛くない逃げ道を探してるだけ。

「だっせぇ。することもないんだし、やってやるよ！」
そんな自分が嫌になり、狂ったように走り出す。
我ながらアホだとは思う。
誰も見てないのに、体を鍛えなかったからといって誰かに咎められるわけでもないのに。
しかも原作介入する気満々だし。
まだ時系列がわかってないけど、そこら辺は原作開始前が相場だろう。
相場？ん？なんのことかわからないがそういうことでいいか。

体を鍛え始めて約5ヶ月ほどが経った。
早い？
早くないって。描写する様な事がなかっただけだから。
特別マッチョになったわけでもなく、それなりにごつくなっただけだし。
だけど、本当に長かった。
まさか人と話せないということがこれほどに寂しいとは思ってもみなかったからな。
俺の前にいた人が死にたくなる気持ちもわからなくはない。
と言っても説得力はないな。
俺はまだ生きてるわけだし、自殺者の気持ちがわかるヤツなんてこの世にはいないだろう。
自殺者の気持ちがわかるなら自殺してるもんな。

いや、まぁそういうことはどうでもいいんだ。
問題なのはなんで5ヶ月経った時に時の進行を止めたか。
どうやら俺には機会があったらしい。
この島から出る機会が。
確実にこの島に進行してくる一隻の船。
それも海軍の、大きな軍艦。

「おーい！おーい！おーーーーい！」

俺はとにかく叫んだ。
空腹で死にそうとか、そういうわけではない。
本当に早く誰かとコミュニケーションを取らないと死にそうだから。

「ガープ中将！我々が向かっている無人島に子供が！」

「うむ、わかっておる。叫び声が聞こえるからのう。それにしても大きな声じゃ。空腹、というわけではないのじゃろうか」

男のいる無人島に向かう海軍の軍艦の上、白い口髭を生やした大男が無人島の方を見つめる。
遠くからでも聞こえる大きな声。
肺活量が高く、喉が強くない限りそんなことは無理だ。
つまり男は喉を潤しているということ。
もしくは無理をしてでも声を張り上げているということの2択。
前者の場合なら罠である可能性も否めない。

「我々が追い掛けている海賊の罠でしょうか。どこかで誘拐した少年を脅して言うことを聞かせているか、それとも仲間か」

「どっちの可能性もあるのう。しかし、まだ判断は出来ん。もしあの子を誤射でもしようものなら海兵の名折れじゃ」

「では――」

「わしが1人で行こう」

「ッ！？しかし！」

「なに、子供1人くらいわけないわ。わしがあの子供と接触したあと森から海賊が出て来ようものならあとから続けば良い、それだけのことじゃ」

ガープは部下を言い包め、船内に臨戦態勢で待機という旨を伝えた。そして軍艦を無人島の岸に付け、ただ1人で降りて男のもとへと歩み寄る。

「あ……あ……」

男は頭の中が整理できておらず、上手く言葉が発せない。

「大丈夫じゃ。落ちつけ。まずは名前でも聞こうかの」

「な、まえ……うぅ……うわあああああん！」

男はようやく人と会話が出来たことにより、込み上げるものがあっ

たのか、ガープの質問には答えず泣きじゃくった。
男の精神年齢的に人前で泣くことほど恥ずかしいことはないが、肉体に引き寄せられて精神も若干だが幼くなったため、気にすることもなかったのだろう。
それに万感の思いを抑えられるほど器は大きくなかった。

「……ふぅ、すいません。お恥ずかしい姿をお見せしてしまって」

ホントに恥ずかしいわ。
何分？何時間？
よくわからないけど兎に角泣きまくったからな。
まさか人前であそこまで感情をあらわにするとは自分でも思ってなかったわ。

「別に構わん。どうやら海賊もおらんようじゃしのう」

そうそう、そう言えばこの人ガープさんみたいなんだよ。
みたいというか、多分本人。

「海賊、ですか？」

「あぁ、追跡中の海賊が追ってのう。船の食糧が底を尽きそうじゃからここで補給するつもりで寄ったんじゃ。川もあるし水分も補給できるしのう」

へぇ～、海賊か。
どんな人達なんだろうか。
いや、それはどうでもいいんだよ！

「ダメ！」

「なにがじゃ？」

「森の動物は食べちゃダメ！殺しちゃダメ！」

まるで子供だな。
自分での残念なおむつの出来だとイヤになる。
でもこれだけは譲れない。
何度も襲われたりしたが、５ヶ月も一緒に過ごしたんだ。
ゴリラ・狼・くま・猪・ライオン・虎・象・怪鳥などなど、愛着が湧いたんだよ。
それを殺されるのもどうかと思うが、それでこの島の食物連鎖を崩壊させられることの危険も危惧した結果だ。

「ふむ、仕方ないのう。木の実ならええんじゃな？」

「え？いいんですか？」

「なんじゃ？お主が動物はダメだと言ったんじゃろう」

「は、はぁ……」

この人はやっぱり良い人なのかもしれない。
幸いここには様々な木の実が存在するし、海軍の軍艦に乗る海兵たちのぶんを含めてもなくなることはまずない。

「おお、そうじゃ。まだ名前を聞いてなかったの。わしはガープ。海軍本部の中将じゃ。お前さんの名前も教えてくれるか？」

「えっと……」

やっぱりガープさんだったか。
まぁ海軍の軍艦に乗ってここまで顔が同じならそれ以外あり得ないだろうな。
それにしても名前、か。
考えたことなかったし、そもそも誰とも話さないから必要なかった。

「チェイス……」

なんとなく、黒い炎で思いつくのがレッドアイズとそれくらいしかなかった。
ナルトのサスケ？
あれは論外だ。

「チェイスか。それで、これからどうするつもりじゃ？ここに残るのか？それともわしらと一緒に来るか？」

ここに残っても地獄、一緒に行っても地獄、大して変わらないんだろうな。
でも助けてもらったんだし、ここは人としての義理を通すか。
それにこんな思いは2度とごめんだ。

「行きます。行かせてください！」

「そうか。なら一緒に来い、チェイス！」

そうして俺は軍艦に乗り込み、その無人島との別れを果たした。

第弐話　海軍本部

俺が海軍の軍艦に乗って2週間ほど経ち、今日ようやく海軍本部に到着した。
途中で追い掛けていた海賊には追い付き、ガープさんが一瞬にして殲滅。
そのあと海底監獄のインペルダウンに引き渡して、ここに至る。
しかしあれだ。ここは広いな。
戦争が繰り広げられるだけあるというか、マリンフォードはやっぱりかなりの広さだ。

「お勤めご苦労さまです！」

ザッ、と海兵が並び、ガープさんの帰還を敬礼で迎える。
俺はその後ろをちょこちょこ歩くのだが、海兵たちの目が恐い。
俺が何かしたというのか。

「今からコング元帥のところに行くが来るじゃろう？」

「あっ、はい」

そんなことは気にも留めずガープさんは気さくに豪快な笑顔で話しかけてくる。
どうせ海兵になるんならどうせ合わないといけないし、行かない理由もないしそれにはイエスで答えた。
コング元帥ってあの頭がトゲトゲしてる人だよね。
結構恐そうだからイヤではあるんだけど。

コンコンッ

そんなこんなを考えている内に指令室に着いた。
流石のガープさんもセンゴクさんが元帥の時の様にはいかないみたいで、ちゃんとノックをしていた。
あぁ、コングさんが元帥をやっているから今は原作21年前。
船の中で去年海賊王が処刑されたと言っていたから間違いない。

「入れ」

「失礼する」

コング元帥からの許可が下り、ガープさんに続いて俺も入る。
っていうかガープさん、敬語使わないんだ。
流石はルフィの祖父だな。

「任務完了じゃ。それじゃあわしはこれで――」

「まぁ待て。いろいろ聞きたい事があるが……その子はなんだ？」

「……わしの子じゃ」

「「なに！？」」

いやいや、拾われはしたがあんたの子供になったつもりはないぞ？
思わず素っ頓狂な声でコングさんとハモってしまったじゃないか。

「『なに！？』と言われても事実じゃしのう」

「でも今その子も『なに！？』ってかわいい声で言ったぞ！かわい

い声で！」

主張するところはそこですか。
なんか俺が入るすきがなさそうだし、傍観でもしようかな。

「わしが拾って来たんじゃ。わしの子以外なにがあるというんですか」

呆れた様にガープはコング元帥を見る。
呆れたいのは俺の方なんだけどなあ。
しかも理屈がおかしいし。

「よし、待て。ここは元帥命令を使わせてもらうとしよう」

俺のためを思っては良いんですけど、職権乱用はダメですよ。

「職権乱用ですか。困ったもんじゃのう。そのような者が海軍のトップを仕切っておるとは」

「貴様に言われたくはないがな。この際どうだ？大将なりに昇進して俺を抑制すればよかろう」

「そこまでするのはめんどうじゃ。ともかく、この子はわしの孫じゃ」

「よくわかった。わかったから一回黙っておれ。そしてその子を置いてまわれ右をして出て行け」

どっちもどっちな気がするけどなぁ。
しかし、コング元帥は俺だけのこしてどうするつもりなのだろう。

「それは出来ん。それで、本題ですがこの子――チェイスを海軍に入れようと思うのじゃが」

あぁ、そうそう。
言い忘れていたけど、まだ悪魔の実のことは言ってないぞ。
言う機会もなかったし、そもそも船の中ではみんなと楽しく雑用してたから能力のことなんてすっかり忘れてた。

「この子をか？見たところ若干８歳と言ったところか。そんな子が生きていけるほど甘くは無いぞ？」

「その辺は大丈夫じゃろう。獰猛な動物がおり、周りの海にも大型の魚介類がおる無人島で５ヶ月ほど生活しておったそうじゃ。間違いはないじゃろう？」

急に話を振られるが、どうせ振って来るだろうとわかっていたので脳内で考えていた文章を発する。

「はい、一応は。ですがそれも悪魔の実の能力があってのことなので、実力があるかと言われれば無いと思います」

謙遜は日本人の美徳、と言いたいところだが、そういうわけではない。
実際自分が強いか弱いかなど、よくわからないのだ。
基準がわからないから。

「「悪魔の実じゃと（だと）！？」」

うっ……声が大きい。

鼓膜を直接狙ったかのような大声を出されたので、思わずビクッとして怯んでしまった。

「お、おぉ、大丈夫だ。すまんな、大きな声を出して。ほら、これをやろう。これでもなめて元気を出せ」

「あ、ありがとうございます」

何か小動物的なモノに見られているのか、飴ちゃんを貰った。
うん、おいしい。
飴ちゃんぺろぺろ……卑猥だからやめよう。俺のイメージにそぐわない。

「それで悪魔の実とはなんじゃ？」

どういう能力か、という解釈でいいんだよね、これは。

「ええっと、自然系（ロギア）悪魔の実、名前はサンサンの実……だったと思います。太陽人間らしいです」

今わかっているのはこのくらいなので説明して、試しに右手から黒い炎をだしてみる。

「ふむ、確かに自然系（ロギア）のようだな」

「これなら問題ないじゃろう。早速わしの部隊に――」

「まぁ待て、焦るな。能力者だからと言って直ぐに戦場に駆り出すわけにもいかんだろうが。いきなり戦場に出して恐怖心でも煽ってみろ、それこそ将来有望な人材を捨ててしまう様なものだ」

おお、これだけ期待されているというのはかなり嬉しい。

「それにまだ子供だ。俺がひきとってしっかりと海軍のことを教えてやろう、うむ」

しかしなにかを企んだかのような表情でそんな事を言われたのでテンションがた落ちだ。

とりあえず、この2人は俺をマスコットの様なものとしか見てないんだろう。

失礼な。俺は人間だぞ。

「いや、ここはわしが引き取ろう。その方がチェイスにとってもいいはずじゃ、のう？」

ここで話を振られてもなぁ。

俺としてはどっちも断りにくく、どちらも断りたいのが本音だけど。

ガープさんと一緒にいていいことなんて滅多にないだろうし、コング元帥と一緒にいるのは色々と気を使いそうだ。

「えっと……まずは雑用からやらせてもらってもよろしいですか？」

「なぜじゃ？」

「あ、いえ、将来人の上に立つのなら、下がどのような思いをしているかとか、そういうのも理解しておいた方がいいと思って」

「はっはっは！なかなか面白いことを言う！確かにそうだな。そうかもしれん。うん、良いぞ。そう望むのならそうさせよう」

笑われた。
そんなに面白いことか、今のは。
当り前のことだと思うが。
自分の下に就くヤツの気持ちを考えることが出来てこその、上司だろう。

「じゃあその雑用をする部隊はわしのところで構わんな？」

「え？それは……本部直轄で、とかは……」

そもそも雑用が部隊に所属する理由もないだろう。
基本的に雑用ばっかりで、暇が出来たら訓練という感じだろうし。

「まぁ見張り役は必要だな。しかし俺も元帥でなかなかここからは離れられれん。ガープも中将で本部を留守にすることが良くある。そういくと……メイ准将はどうだ？」

聞いた事のない名前だ。
男でも女でもありそうな名前だけど、准将になるくらいだから男の人なのだろう。
こういう考えは良くないけど、やっぱり力は男の方が強いしね。
力だけじゃないというのが階級だけど……あぁ、埒が明かない。
どっちでも構わないよ、この際。

「うーん……まぁええじゃろう。あんたに預けるよりは」

「俺もガープに預けるよりはええと思うな。そういうことだから、ここに行ってみろ」

「はい」

受け取ったのは小さな1枚の紙。
7階の地図の様だが、このばってんがついているところがそのメイ准将のいるところなのだろう。

「失礼しました。ありがとうございますね」

「「はうっ！」」

感謝の意味を込めて笑顔を送り、パタパタと走って階段を降りて行く。

『廊下は走れ！』そんな壁紙があったから、仕方なく。
なにはともあれ無事海兵になれたのだ。
これからようやく俺の海兵人生の幕開けだ――！

第参話　桃色ｎｉｇｈｔｓ

テクテクテクテク……
たったったった……
コツンッ
「あいたっ！」
「ひゃ！」
痛いなぁ、もう。
なんなんだ、突然。
廊下の角でぶつかるなんて少女マンガじゃないんだから。
でも女の子の声みたいなのがしたよな。
まさか――
「だ、大丈夫！？」
案の定というか、額を真っ赤にしたブロンドがかったピンク色の髪の少女が転んでいた。
う～ん、なんでこんな小さな子がいるかわからないが――同じくらいの年の俺がいるから事情があるのだろう――とりあえずぶつけたところを冷やしてあげないと。
「う、うん……」

「よいしょっと」

「ひゃあ！？」

「医務室ってどっちかわかるか？俺はここに来てからまだ少し――っていうか今日来たから、まだ全然わからないんだ」

無人島で鍛えた甲斐があった。
このくらいの女の子なら楽勝でお姫様だっこ出来るぞ。

「え、えっと……」

「どうかしたか？顔紅いぞ？熱でもあるのか？」

「そういうんじゃなくて……」

どうしたのか、少女の顔は真っ赤だ。
俺とぶつかったせいで熱が上がったのかもしれないので、尚更放ってはおけない。

「事情は行きながら聞くから、しっかり捕まって」

「……」

「早く、ほら」

「う、うん……」

やっぱり少し元気が無い気がするな。
急いで医務室に行こう。

「ここは？」

「あっち」

「ここは？」

「向こう」

「ここは？」

「そっち」

……なんだなんだ？

同じところをぐるぐる回っている様な気がするのだが……。

「……ふふふ」

「な、なに！？」

「ううん、ごめんなさい。おかしくって」

「おかしい？えっと……顔？」

これは言っておくが俺の顔じゃないんだぞ。

というか人の顔を見て笑うなんて性質が悪い。

「あははっ。そうじゃなくて、ほら。さっきから同じところぐるぐる回ってるから」

「……お前がそう指示したんだろ？」

「あれ嘘」

なんだそれ。
つまり俺はこの子に騙されて無駄な労力――というほどでもないが――を使わされたということか？
有り得ない。

「ごめんごめん、そんなに怒らないで。楽しかったからついつい」

「……はぁ～」

怒ろうかとも思ったけど、その少女が本当に楽しそうに笑っているので許すことにした。
つくづく甘いなぁ、俺は。

「それより大丈夫なのか？おデコまだ赤いぞ？」

「ああ、うん、大丈夫。でも乙女の顔に傷をつけるなんて、責任とってよ？」

そういって目を瞑る少女。
傷・責任……とくると思い当たるのが１つしかないのだが、それはダメだ。
というより肉体的年齢はまだそんな歳でも無いし、しかもまだ名前すら知らないのに出来るわけないだろう。

ぺしっ

「いたっ」

「子供が生意気言うな。ほら、大丈夫なら降ろすぞ？俺は用事があるんだよ」

まったく、最近の子供はこれだから困る。

「そっちの方が子供じゃん」

「いや、そっちだし」

「そっちじゃん！」

「そっち！」

「「うぅ～！！」」

ぺしぺしっ

「あいたっ」

「うっ」

その少女と唸り合っていると背後から誰かに頭を叩かれた。

振り返ってみると、そこにはまたピンク色の髪をした、今度は綺麗な女性が立っていた。

「まだまだどっちも子供でしょ。……キミがチェイスくんであってる？」

この人は俺を知っているということは、この人がメイ准将なのだろうか。
予想の斜め上程度ではない、想像もしていないほど綺麗な人だった。

「はい、えっと……」

「私がメイ。よろしくね。これからキミは私生活でも私と一緒だから、覚悟しなさい！」

「はい！」

ウインクして手を拳銃の形にしてバンッ、というような感じで、とても良い人そうだ。
母性溢れる様な気もするし、頼れるお姉さんみたいだ。

「それからうちの子もよろしくね」

「うちの子？」

「ほら、だっこしてる子よ。この子は私の娘のヒナ。いつもは家で1人で留守番させてるんだけどね、今日はたまたま」

俺の体に電撃が走り抜けた。
なにか色々とショックである。
まずこの人が結婚していること、娘がいること、なによりこの子がヒナであるということ。
色々と言ったが数えるほどしかなかった、すまん。

「えっと……よろしく、ヒナ」

「うん……よろしく、チェイス」
「なーに赤くなってのよ、ヒナ」
「あ、赤くなんかなってないもん！」
「おれおれ～。そうやって意地になってまた～」
「なってないもん！」
「ふふっ、そういうことだから今日は2人とも先に帰ってなさい。お母さんもあとで帰るから」
そう言ってメイさんはぱたぱたと走って去って行った。
どういうことなのか説明してくれても良かったんだが、まぁ言われた通り帰るか。
「あの……降りる？」
「べつに乗ったままでもいいよ」
そういうことらしい。
顔を真っ赤にしながら視線をあらぬ方向へと向けながら、「だっこしたまま連れて行け」という命令がくだされた。
わがままだなぁ、この子は。かわいいけどさ。
「ふふっ」
「な、なんで笑うの……？」

「いや、かわいいなぁ、と思って」

「〜〜〜〜〜ッ！！」

さっきより顔を紅くして、言葉にならない言葉を上げる。
しかし暴れて降りようとしない辺り、そんなに俺の腕の中がいいのだろうか。
自分じゃわからないからな、そういうの。

「なあ」

「どうしたの？」

そう言えば今気付いたがヒナの口調が普通だ。
べ、別に忘れてたとかじゃないんだからね！？ｂｙ作者

「俺の腕の中ってさ、居心地いいか？」

「う、うん。あったかいし、気持ちいい……かな……」

気持ちいいはよくわからないが、居心地は悪くないそうだ。
よかったよかった。
居心地が悪いのに無理矢理乗せてたら罪悪感にさいなまれるしな。

「なんで笑ってるの？」

「笑ってたか？」

「うん。楽しそう」

「そうか。まぁ楽しいよ、こうやってヒナと話してるのは」

「〜〜〜〜〜ッ！！」

俺が言いたかったのは人と話すことが楽しいと言いたかったのだが、どうやら『ヒナと』話すことが楽しいと受け取ってしまったらしい。まぁこっちに来てから一番楽しく会話できたのはヒナだけど。海軍の軍艦の中は年上ばっかりで気を遣ってばっかりだったけど、同い年くらいの女の子と話すのは楽だな。気兼ねなく話せる。

「ここがヒナの家……」

流石准将といったところか、3人暮らしである筈なのに立派な2階建ての一戸建てだ。恐れ入る。今日からここに俺も住むんだが、「娘はやらん！」とかヒナの父親に言われたらどうしよう。いや、そんな気はないけども。

「うん。あっ……」

「どうした？」

「鍵が取れない」

「降ろそうか？」

「ううん、チェイスがとって。ポケットに入ってるから」

ホントにわがままなんだな、この子は。
もう家の前に来てるんだから降りても良いだろうに。
流石に腕がだれて来たぞ。

「しょうがないなぁ、もう。ヒナは甘えん坊なんだな」

「……うん」

肯定するなよ。
まぁ実際甘えまくりだしな。
少しは厳しく接せねばならないとは思うんだが……俺には出来ない。
途中で降ろそうとしたら涙目と上目遣いで「イヤ……」って言ってくるんだから。
とんだ女豹である。

「えっと……」

ヒナの背中を右ひざに乗せて、右手でヒナの穿いているズボンのポケットを探る。

「ひゃ！」

「ご、ごめん！」

「い、いいよ……続けて」

いや、続けるもなにももうさっきの悲鳴の時に発見して鍵は猿げっちゅなんだが。

「……むぅ」

なにが気に入らないのか、俺が鍵を見せて笑うと不機嫌顔になってそっぽを向いた。
女の子はやっぱりわからんなぁ……。

ガチャッ

いつもは1人で留守番と言っていた通り、家の中はシーンとしている。
そこで俺は靴を脱ぐのだが、またヒナが「脱がせて（なんか少しエロかった）」と言うので靴を脱がせ、抱っこしたまま家の中に上がった。

「俺風呂入りたいんだけどいいか？」

「うん、入って来て」

妙に素直というか、少し期待外れというか、ヒナはそう言うと直ぐに降りて家の中を案内してくれた。
風呂なら軍艦の中にも完備されているのだが、ガープ然り、オッサンの目がどうにも気になってシャワーだけですませることが多かったからなぁ。
ゆっくり風呂に入っていたら確実に襲われるであろう危機感の中で風呂に入れるのは勇者か魔王くらいだ。

「あぁ～……生き返る～」

我ながらジジ臭い台詞であると自覚はしているが、風呂に入ると自然と出て来てしまうものだ。
やっぱり久し振りの湯船はいい。

湯加減といい広さといい最高だな。
足を伸ばしても向こう側に届かないんだぜ？ヒナの家の風呂。
こりゃあ2人入っても余裕だろ。

ガチャッ

「ち、チェイス……」

「ひ、ヒナ！？」

変なことを思うのではなかった。
1人が限度である。人間として。広さは関係なく。
ヒナはバスタオルで体を隠しているものの、発達し始めた胸に自然と目がいってしまう。
なんで男って本能には逆らえないんだろうね、不思議だ。
世界三大七不思議にいれてもいいくらいだ……ん？おかしいけど気にするな。気にしたら負けだ。

「せ、背中流してあげる……！」

そうか、さっきやけに従順だったのはこのためか。
はめられた！
孔明だな、こいつ。

「いや、いいよ。恥ずかしいから」

「こっちも恥ずかしいよ……？」

それなら何故入って来るんだ。背中を流そうなどと思ったのだ。わけわかめちゃんじゃないか！

「あー……じゃあ俺はお先に……」

「座って？」

「……はい」

怖かったのではない。
雨の日に捨てられた子イヌの様な目をしていたのだ。
あんな目で見つめられて断れるなら俺は今頃地獄で鬼をやっている。

ゴシゴシっ……

ああ、でもこうやって他人に背中を流されるのもいいかもしれない。
後ろにいるヤツがヒナではなく、ただ銭湯で居合わせたおじいちゃんだと思えば……無理か。
天と地ほどの差があるもんな。

「はい、反対向いて」

「ああ」

次は俺がヒナの背中でも流すんだろう、そう思って振り向いたが、
如何やら違ったらしい。
そこに待ち構えていたのはこっちを向いたままのヒナ。
……ああ、タオルを渡そうというんだね？わかっているさ。

ギュっ……ぐぐぐぐっ……

あれ？おかしいなぁ？タオルを渡してくれないぞ？

「どうした？」

「前も流してあげる」

つまりお腹をゴシゴシされるのか。
想像するだけで複雑怪奇な光景である。

「それはやめよう」

「遠慮しなくて……いいんだよ？」

いや、してないぞ。
俺は全力で拒んでいるんだ。
遠慮なんてしてない。

「いや、流石に前は手が届くからな。自分で洗うさ」

「……じゃあ頭洗ってあげる」

「それならいいや」

前は事故があるからな、事故が。
ヒナは早速シャンプーハットを俺の頭に被せ、ぐしゃぐしゃと洗い始める。
これ好きなんだよね、俺。
自分じゃない人の手で頭を洗ってもらうのは温かくて気持ちいいから。
美容院を思い出すぜぃ……。

バシャァ……

「ありがと、ヒナ。すっげー気持ち良かった」

「う、うん……良かった……」

「ふふっ、ホントありがとな」

わしゃわしゃとヒナの頭を撫でてやると、ヒナもハムスターの様に目を細くして気持ち良さそうな顔をする。
小動物の様な、というのはまさにこのことか。うん、わかりやすいな。

「じゃ、じゃあ先に上がって部屋で待ってて」

「おう。あんまり長風呂するなよ、風邪引くから」

「うん……！」

ああ、本当に気持ち良かった。極楽極楽、って感じだ。
極楽過ぎてトンボが飛んでたよ。
しかし俺が先にヒナの部屋に入っても良いのか？
まぁ見られたらまずいものなら隠してるだろうし、問題ないか。

ガチャッ

「うおっ……これは……」

だらしない部屋だった。
どうやったこれだけ散らかせるのか、見当もつかない。

お菓子の袋やら空ビンやら服やらパンツやら……。
見られていいのか、こんなだらしないのを。

「はぁ……仕方ないな」

長風呂するなとは言ってあるがヒナも女の子だ。髪を洗うのに時間が掛かるだろうし、その間に片付けるか。
ゴミはゴミ箱へ。
散らかった本は本棚へ。
脱ぎ散らかしてある服は洗濯機へ。
パンツは……もらおう――じゃなくてこれも洗濯機だ！バカ野郎！
あるべきものはあるべきところへ。
勝手に掃除して悪いと思ったが、まぁいいか。

「……あれ？綺麗になってる……」

「ああ、綺麗にしといた――ってなんでバスタオルで出てくるんだ？」

まだ髪をしとしとぬらしているヒナが部屋に戻って来て驚愕の表情を浮かべる。
怒る様子も無さそうだ。

「え、えっと……それは……」

「どうした？服着ないと風邪引くぞ？」

「う、うん。でも……ぱ、ぱ、ぱん、つ、が……」

「パンツなら洗濯機に入れて回しといたぞ？ダメだったか？」

そういうとヒナの顔は一気に青ざめた。
はて、パンツを見られて恥ずかしいと思うのなら顔が赤くなる筈なのだが、おかしいな。

「もう……ない……」

「なにが？」

「あれ！最後のパンツなの！」

女の子が恥ずかしげもなくパンツなんて言うな。
しかし最後？映画に出来そうなタイトル――ラストパンツ――だが、それは置いておいて最後って最後だよな。
たぶん穿いて無かったパンツ。
しかもヒナのパンツは全部洗濯機の中らしいぞ。

「お嫁に……行けない……！！」

「わ！ご、ごめん！知らなくて！ホントごめん！」

一気に泣きそうな表情になり、というか涙をぽろぽろと零している。
俺は本気で土下座した。滑る様になめらかに。

「うっ……ひっく……うぅ……」

これはまずい。
どうすればいいんだ？
どうやればヒナは泣きやむ？
パンツ、パンツがあればいいのか！？

レッツゴーパンツ！意味わからんけど。
レッツショッピングだ！レッツじゃないけど。

「か、買ってくる！」

「行かなくていい……」

「いや、でも……」

「このままでいいもん……」

それはまずいだろ。
バスタオル１枚で過ごさせて風邪でも引かせようものなら男がすたる。
泣かせた挙句に風邪まで引かせるなんて、男以前に人として存在が危ぶまれる。

「じゃあどうするの？」

「このまま……チェイスと寝る」

「はぁ！？」

待て待て、ウェイトだよ、ヒナくん。
俺も落ちつけ。

「寝るっていっしょにか？」

「……」

こくっっと無言で頷くヒナ。
これで断れば俺はもう生きていける気がしない。
「でも風邪引くかもしれないぞ？」
「裸で抱き合えば風邪引かないってお母さんが言ってた……」
『そりゃあ遭難した時の話だよ』
『そうなんっすか！』
そうじゃない、こんなしょうもない親父ギャグを言ってる余裕はないんだ。
あの母親は余計なこと吹き込んでるな、くそ。
裸はまずいだろう、裸は。
「しかしだな、俺は男であってヒナは女の子であるからしてだな……」
「えっくし」
「ええい！ままよ！」
「（今のちゃんとしたくしゃみに訊こえたかな？）」
くしゃみまでされたらたまらんわ。
俺はパンツ以外は脱ぎ捨て、もう全てを諦めてヒナをきつく抱きしめながらベッドにダイブした。
当然ヒナは裸で、その、あれがあれして直接あたるわけで……。
「チェイスの心臓の音、すっごい大きいよ」

ああ、もう！余計なことを言うな！
寝るぞ！俺は寝る！睡眠王に俺はなる！
まさか今日会った女の子と裸で一夜を過ごすとか考えもしなかったわ。

「また大きくなってる。こっちのも、聞く？」

「もう寝ろ！ネロ！クラウディウスだよ！暴君だから！くまさんだ！ぷーさんだ！はい、おしまい！さっさと寝る！」

「恥ずかしいの？」

もう話しかけないでくれ、頼むから。
ああ、恥ずかしいよ！
こんな状況で恥ずかしくないヤツは人間じゃねェ！

「ほら、手で触ればわかると思うよ？」

「やめろぉぉぉぉぉ！！」

かくかくしかじか、ちょめちょめがあって俺は寝た。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3072v/

ONE PIECE　～世界を照らす太陽譚～

2011年8月5日21時49分発行